

〈焦点1〉

「聞き書き」における「聞く」, 「書く」, 「話す」

小田豊二
作家

Listening, Writing and Telling in Oral Biography

Toyoji Oda

Writer

キーワード

語る	tell
聞く	hear
書く	describe
聞き書き	oral biography

I. はじめに

いま、全国各地で「聞き書き」が広がっている。

2018年8月31日から9月2日まで岩手県一関で開催された「日本聞き書き学校」(校長・ノンフィクション作家 柳田邦男)には、北は北海道から南は長崎、熊本、宮崎まで160人の地域の代表者が集まり、それぞれの活動報告、キャリアアップ講座、講演など「聞き書き」の魅力を確認し合い、お互いの親睦を深めた。

「日本聞き書き学校」とは言っても、もちろん「聞き書き」専門の学校が存在するわけではない。それぞれ各地の「聞き書き隊」と呼ばれる「聞き書き」を愛好するサークルの人たちが全国から集まる時だけ「日本聞き書き学校」と名付けたのである。

いわば、全国のサークルがその時だけ「日本聞き書き学校」の「分校」となるわけである。

しかし、侮れない。この「日本聞き書き学校」、今回で5回目である。2年に1回行われるから、すでに10年も続いていることになる。第一回は宮崎で、以後、能登、秋田、長崎、そして一関。次回2020年は熊本開催が決まっている。オリンピックのように、各地の「分校」が「次回はわが町で」と立候補する。なかなか、東京が主催できないところをみると、オリンピックより開催するのが難しいのかもしれない。

なぜ、「聞き書き」の活動が全国的な規模で、これほど広がっているのか。

そこに何があるのか、以下、考察していきたい。

II. 「聞き書き」とは何か

「聞き書き」とは、語り手が話したことを「聞き」、それを「書く」ことである。

もちろん、そんな単純な行為は、いま始まったことではない。日本最初の文学と言われている『古事記』⁽¹⁾は、「聞き書き」であった。その証拠に、「稗田阿礼 述 太安万侶 記」と冒頭に書かれている。

わかりやすく言えば、『論語』⁽²⁾も聖書の『福音書』⁽³⁾も「聞き書き」である。『論語』には「子曰(し、いわく)」と必ず書かれている。「孔子先生はこうおっしゃった」のだから、「聞き書き」だし、『福音書』も「主は言われた」とあるから、イエスからの「聞き書き」である。さらに言えば、親鸞が書いたかと思われる『歎異抄』⁽⁴⁾も、弟子の唯円による「聞き書き法話集」であるし、マルコポーロの『東方見聞録』⁽⁵⁾もマルコポーロがジェノバの牢獄に閉じ込められた時に、すでに刑に服していた物語作家ルステキエロが本人から聞いたことをマルコポーロの名前で書いたものである。

それにしても、その「聞き書き」がなぜ、いま、全国に改めて広がっているのか。

それは、人口の高齢化に伴う「福祉」活動の広がり大いに関係があると思われる。

高齢者の異様な増加によって、いわゆる老人の「おひとりさま」⁽⁶⁾が増え、さらに進めば、老人施設への入居も激増している。

そうした人たちに少しでも手助けしようと組織されたのが、地域のボランティアの人々であった。しかし、ヘルパーの資格も持たない彼らがその地のお年寄りのために何ができるのか――。

実は、誰でも簡単にできて、当該のお年寄りに喜んでもらえるボランティア。それがお年寄りから昔話を聞いて、その人の話し言葉で書いて、一冊の本にして差し上げる「聞き書き」だった。

お年寄りは、話したくても相手がいない。一日中、誰とも話さない日もある。そんな時に訪ねてきてくれて、両親の話、楽しかった子供の時の思い出、好意を抱いた異性のこと、つらかった戦争時代の話、孫やひ孫に伝え残したいことなどに熱心に耳を傾け、聞いてくれるボランティアを歓迎しないわけでもない。しかも、それがアルバムから撮った昔の写真とともに、自分の話し言葉で書かれている世界で1冊の冊子になって届けられるのだから、大いに喜ぶのである。

逆に、その1冊にまとまった本を読むことによって、家族もまた、自分が知らなかった両親や祖父母の昔のエピソードを知るだけでなく、それまで元気のなかったお年寄りが、自ら率先して話すことで生き生きとし、脳が活性化する姿を目の当たりにする機会が増えるわけだから、お年寄りの周囲の人々もまた、遠くから通って来てくれる「聞き書き」ボランティアを歓迎するわけである。

それもあってか、この「聞き書き」の効果は、各地域の自治体、福祉協議会、医師会、病院、看護大学などに理解が深まり、全国の各地で「誰でもできる聞き書きボランティア養成講座」が開かれているのが現状である。

もう一度、書く。

私が率先して提唱している誰でもできる聞き書きとは、「お年寄りから話を聞いて、それをその人の話し言葉で書いて、1冊の本にして差し上げる」ことである。

Ⅲ.「聞き書き」の方法——話したいことを「聞く」

さて、その方法だが、「誰でもできる」というのだから、やり方は簡単である。

自分の両親または祖父母、親戚、知人のなかから「語り手」を見つける。もし、いない場合は、友人や福祉関係者に依頼して、「昔話を語りたい」というお年寄りを紹介してもらう。

その人にご挨拶にうかがい、2回目から話をうかがう。ただし、ここで大事なことは、語り手に対して聞き手は「こちらが知りたいこと」を聞くのではなく、「相手が話したいこと」を聞くことである。

同じ「聞く」行為にしても、ここが「聞き取り」と「聞き書き」の根本的なちがいである。

人は誰でも「話したいこと」がある。同じ昔話でも、「楽しかった思い出」は尽きないが、「嫌な思い出」は封印しておきたい。したがって、「楽しかった思い出」を次々と思い出すことによって、お年寄りの脳は活性化し、心も弾む。実際、一度「語り手スイッチ」が入ってしまい、3回の予定が3年も「聞き書き」が続いている例もある。

だが、そうしたお年寄りが自ら「話したいこと」を私たちは、どうしたらわかるのだろうか。

それも、実に簡単である。

それには「目に見えない薬箱」を持っていくことである。薬箱には何が入っているのか。そこには「言葉」という名の薬が入っている。なぜ、「言葉」が「薬」なのか。それは、その「言葉」によって話者の反応が異なるからである。

たとえば「運動会」という「言葉」を高齢者に与えてみよう。するとすぐに「薬」の反応が出る。子供の頃、足の速かったお年寄りは「あたしかい、あたしはね、リレーの選手だったんだよ」と一気に盛り上がる。そうした話者には、「運動会」という「言葉」の「薬」の効果によって、昔の記憶、つまり記憶の底に沈んでいた「新しい記憶の島」が隆起し、一気に元気になる。

だが、この「運動会」という「薬」が誰にでも効くかと思えば、そうではない。

「運動会？ 知らん、忘れた」と怒る人がいる。その人は「運動会」にいい思い出がない。足が遅かったのかもしれない。つまり、「言葉」の薬によって

元気になる人もいれば、不愉快な思いを抱く人もいるわけである。

そういう人には、また別の「薬」を渡してみる。「母親の話」、「お正月の話」、「子供時代の遊びの話」、「わらべ唄」……。どれでもいい。「薬」が効き、話者の「楽しい思い出」につながったら、そこを丹念に聞くこと。

それが「話したいことを聞く」ということなのである。

IV. 「聞き書き」の方法——話者の話し言葉で「書く」

「聞く」の次が「書く」である。

「聞き書き」における「書く」は、私が提示している方法は「話し言葉」すなわち「聞き書き体」という文体によって表現する。

言い換えれば、「その人になりきって」話者の語りを再現するのだ。

え、子供の頃の話か？ あんまりいい思い出はないなあ。私は貧しい農家の七人きょうだいの長女だからなあ、小さい時から下の子の子守で、学校なんか満足に行けなかったんだよ。

そうすると先生が家に来て、「学校さ、来るように」って言うんだけどな、親も「子守してもらわんと働けんから」って断るのさ。だったら、弟や妹を連れて学校に来ればいいってことになって、ひとりおぶって、ひとり手をつないで学校さ行った。

でもな、勉強なんかできるわけないさ。だって、背中の赤ちゃんが教室で泣くんだから。しかたがねえから、みんなが勉強している間、運動場で背中の赤ん坊、あやしてたら、今度は弟が「姉ちゃん、腹減ったよ」ってなあ。今思い出しても、涙が出る。せつねえよなあ。⁽⁷⁾

これが、聞き手であり、書き手である自分を完全に消して、話者に憑依して書く「聞き書き体」の文体である。

声に出して読んでもらえればさらによくわかるが、まさに、語り手であるお年寄りが今、目の前で話しているようだろう。まして、この話者を知って

いる家族や知人は、たとえこの人が亡くなったあとでも、おばあちゃんはこの「聞き書き」作品のなかでいつまでも生き続けるのである。

現に、作品をコピーして、一周忌に参加者に配布する例は枚挙にいとまがない。

V. 「話す」ことで、自分の「物語」を確認する

では、逆にボランティアによって、「聞き書き」をされた話者には、いったい何が起こるのかについて、最後に考察してみた。

一般に、「聞き書き」がうまくいった場合の話者は、聞き手に対して感謝する。それは、話を聞いてくれたお礼だけではなく、多くの人が「生きがい」を感じるからである。

特に話者がお年寄りの場合、「自分はもう世の中に役に立たなくなった」とあきらめていた人が、「ええ、そうだったんですか。勉強になります」、「ああ、その料理のやり方、教えてくださいよ」などという聞き手の上手な相槌によって、まだ自分が人の役に立てるという自信を取り戻すこともしばしばだ。

また、これまで誰にも質問されたことのないことを聞かれるたびに、確実に記憶が蘇ることによって、脳が活性化してくる。これも、うれしいことだ。

それに、聞き手が「自分が知りたいこと」ではなく、話者の「話したいこと」を探してくれるおかげで、「話す」ことそのものが楽しくなる。そして、何より、自分がこれまで生きてきた「物語」を改めて確認することができる。

自分がどこで生まれ、どうやって育ち、そして成長したあと、どんな思いで人生を生きてきたのか、高齢者が「聞き書きボランティア」に「話す」ことによって、改めて自分の人生を生き直すことができる。

冒頭に、全国各地に「聞き書き」が広まっている、と書いたが、その理由は「聞く」、「書く」、「話す」力がいまこの時代に、福祉や医療、介護の場で、まさに必要とされているという事実をはっきりと証明しているのではないだろうか。

注

(1) 天武天皇の命により稗田阿礼が暗誦し、これ

- を太安万侶が撰録。712(和銅5)年1月完成。
- (2) 孔子と高弟の言行を弟子たちが記録した書物。四書のひとつ。
 - (3) イエス・キリストの言行録。マタイ, マルコ, ルカ, ヨハネの四種あり, 書き手がちがうためにそれぞれ文章が異なる。
 - (4) 親鸞の語録。鎌倉後期, 宗派のなかの論争をおさめるため, 弟子の唯円が書いたとされる。
 - (5) 13世紀, マルコ・ポーロが口述したものをルスチキエロが記したもの。
 - (6) 社会学者上野千鶴子著『おひとりさまの老後』(文藝春秋刊)より。
 - (7) 『雪国 89歳の郵便配達おばあちゃん』(廣済堂出版刊)より。